「伏した都市」ガッシャ

蛮族キャンペーンにおいて、「翠将の妹君」チッヒが拠点としているのが、「伏した都市」ガッシャと呼ばれる地底都市です。蛮族の叛逆の拠点として地下洞窟を改装して築かれた都市であり、かつての霧の街などと比べると必要最低限の設備しかない、申し訳程度の都市と言えます。

特筆すべき点といえば、都市レベルは低いにも関わらず、その主であるチッヒの影響から、ガメル貨幣を用いた通貨制度が徹底されている点です。ガッシャには主に人族から強奪してきた武具や消耗品を取り扱う商店がありますが、その取引には物々交換ではなく、ガメルによるやり取りが行われます。

ガッシャは清き水を湛えた広大な面積を持つ、エナ湖という名の地底湖の湖畔に築かれています。湖畔の山の手に、チッヒは住民からは「ハイカキン城」とも呼ばれる大きな館を構えています。チッヒはこの館の中で、霧の街を奪還しようと計画しているにはいささか熱意の感じられない、享楽的な生活を送っています。目に掛けている蛮族には、時折自らが足を運び任務を与えることもあります。

下町には前述したささやかな商店と、コボルドの料理人による食事処、ダルクレムなど第二の剣の陣営の神殿が無秩序に立ち並び、街路には都市の住人でありチッヒの軍勢に下った蛮族たちがうろついています。

蛮族の都市の割に、人族の奴隷がほとんど存在していない点が珍しいと言えます。

ハイカキン城（黄金宮）

エナ湖畔に築かれたガッシャの、山の手と呼ばれる環境が整備された土地の最も一等地に建てられたチッヒの邸宅です。その外観は白亜の大理石と黄金で作られたなんとも趣味の悪い金ピカな豪邸であり、住人たちはチッヒに畏怖と敬意を込めてハイカキン城、またはその見た目から黄金宮と呼んでいます。実際には大豪邸ではありますが、城と呼べるほどの設備が揃っているというわけではありません。

チッヒはこの邸宅の中で、日々霧の街奪還の計画を練っていると思いきや、実にバジリスクらしい享楽的な生活を送っています。一応、体裁を保てる程度の信頼のおける護衛役が邸宅内に配備されているようですが、よほど自身の実力に自信があるのか、とても一国一城の主を守るための兵隊とは言い難い人数のようです。

チッヒ自らが手駒に依頼を与える時などには、邸宅に招待して食事を振るまったりすることもあるらしく、さほど閉鎖的でもないようです。

しかし街ではこの邸宅についてはいろいろな噂があり、地下に秘密の施設が隠されており、チッヒに反旗を翻した裏切者が囚われ、強制的に怪しげな労働に従事させられているとか、邪眼の力で宝石に変えられ地下に貯蔵されているとか、その噂のバリエーションには枚挙にいとまがありません。

「翠将の妹君」ハイカキンチッヒ

「気軽にチッヒと呼んでくれていいですよ♪」

・ジェイドバジリスク（？）/女/？歳

「伏した都市」ガッシャの支配者にして、霧の街の王者ヤーハッカゼッシュの妹を名乗るバジリスクの女です。最も、その関係性が事実であるかは定かではありません。

髪は栗色に近い茶色ですが、光の加減によっては深い緑に見える独自の特徴を持ちます。左目のみを金貨を加工した眼帯で隠しており、露わになっている右目の瞳は翡翠色をしています。常に人のよさそうな微笑みを浮かべていますが、怒るときも笑顔で怒るため、底知れぬ恐怖を感じさせます。

人族社会の貨幣制度に非常に高い関心を抱いています。蛮族社会の非効率な物々交換よりも洗練され、スムーズに取引を進めることが出来る合理的な部分に強く感銘し、ガッシャでは人族から奪ったガメル銀貨や金貨を流通させた貨幣制度を徹底しています。そのことからか、特定の神を信仰しているわけではありませんが、第一の剣の神である貨幣神ガメルに多少興味を惹かれています。

性格は至ってバジリスクらしく享楽的であり、日々を気楽に過ごしています。自分が動くことより部下に働かせることを良しとしており、霧の街奪還の野望を持っている割には自分自身は積極的に活動していません。ただし、部下を働かせるためなら、自らが部下のもとへ出向き、直接任務を与えることも、優秀な蛮族を自らスカウトすることも厭いません。

お金の他にも人族の服装にも興味があるらしく、いろいろな衣服を揃えては自分の館の中で一人ファッションショーを楽しむという趣味を持っています。

その実力もまた未知数ですが、翡翠化の邪眼は間違いなく使用できるという情報があり、ジェイドバジリスクであると推測されています。

墓地島

エナ湖にはいくつかの小島が浮かんでいますが、その中で最も大きな島が墓地島です。島全体が死んだ蛮族を埋葬する集団墓地として機能しています。

ガッシャでは、チッヒの施策により街中に死体を放置してアンデッドを無秩序に発生させることはご法度とされています。墓地島内でのみ、この法令は適用されないため、街で死んだ蛮族や、戦で死んだ蛮族の亡骸の大半がこの島に持ち込まれます。

島に一か所だけある船着き場のすぐそばに墓守小屋が置かれ、唯一の墓守を務めるアヌビスの少女が常駐しています。このアヌビスの少女ルンは、チッヒから特別な待遇を受けている有力蛮族の一人で、高レベルの神聖魔法と操霊魔法を操ります。

基本的に埋葬方法はルンに一任されているため、ルンは貯蓄を増やすために、利用者に複数の埋葬法を提示し、それに見合った料金を徴収しています。

無料で受けることが出来る「墓守のおまかせコース」は、ただ穴を掘って死体を埋め、墓石も何もなく土を盛るだけという簡単なものです。妖魔などの下級蛮族が、仲間や身内などを埋葬しに来るときによく選ばれるコースですが、「おまかせ」の真意とは、埋めた後に墓守が掘り返し、死体をどうするかは墓守次第という意味になります。この埋葬法で埋められた死体は、ほぼ間違いなく、ルンの使役するアンデッドの材料として用いられることになるでしょう。このことは暗黙の了解となっており、埋葬にお金をかける余裕のない下層の蛮族たちは、それを承知で頻繁に利用しています。

有料のサービスであるならば、墓石が用意され、アンデッドの素材として使用しないという特典が付く形になります。死者に対してある程度以上の感情があるものは、有料のサービスを利用しています。しかし有料の中にも、土葬、鎮魂土葬、火葬と3段階のランクがあります。土葬の場合、自然にアンデッドとして復活してしまうことがたびたび発生します。それを回避したければ、埋葬の際にレクイエムを捧げてくれる鎮魂土葬、さらに完全に灰まで焼き尽くすことでアンデッド化の可能性を限りなくゼロにした火葬と、死者と利用者の地位や財力により各種選択されます。

さらに一軍を任されている将や、街の重要なポストに就く蛮族が死んだ場合など、大きな地位にあるものは墓地島の地下に広がるカタコンベに納棺されることになります。こうした有力蛮族たちは、遺体にプリザーベイションを施され、豪奢な棺に生前の愛用品などと共に収められます。カタコンベにはルンが特殊な呪法で作り出した永続化されたアンデッドたちが無数に配備され、厳重な警備となっています。

なお穢れが少なく、金銭的余裕がある蛮族の中には、高い操霊魔法の腕を頼って、リザレクションを請いにくるケースもあるようです。

埋葬の料金一覧

コース	値段	詳細
おまかせ	0G	土葬＋盛り土。埋葬後、死体がどう使われようがそれは墓守の気分次第。
土葬	100G	土葬＋簡易墓石。アンデッド化する危険性はあるが、材料には使用されない。
鎮魂土葬	500G	土葬＋呪歌レイクエム＋墓石。アンデッド化の危険性を抑えているが、経年でアンデッド化する可能性はある……らしい。
火葬	1000G	灰になるまで火葬＋墓石。ここまでやればまずアンデッド化はしない。
死者蘇生	10000G	操霊魔法【リザレクション】の行使。

「孤独な墓守」ルン

「……用入り？　墓守のおまかせコース0ガメル、土葬100ガメル、鎮魂土葬500ガメル、火葬1000ガメル、死者蘇生10000ガメル」
・アヌビス/女/18歳

ガッシャの中で、チッヒから好待遇を受けている上位蛮族の一人です。浅黒い肌と対照的な病弱にも見える真っ白な髪を持ちます。まだ年若いアヌビスの少女ですが、高いレベルの操霊魔法と神聖魔法を操ります。

地底湖に浮かぶ墓地島でたった一人の墓守としての使命を任されています。穢れに満ちた蛮族の死体は、放っておけばアンデッド化の危険性が非常に高いため、蛮族社会では墓守の存在は欠かせないというチッヒの考えから、特別の待遇を受けているわけです。

利用者に複数の埋葬方法を提示し、それにより料金を徴収しますが、これもチッヒが許可を出しています。

性格は非常に根暗で、積極的に人と関わろうとしないダウナーなタイプです。反面、一度親しくなれば一応、できる限りの協力はしてくれるツンデレタイプという一面を持ちます。友人や仲間という存在がほとんどいないため、その真の性格を知るものはほとんどいないようです。

大衆酒場「鐚銭亭」

ガッシャの中心部の、申し訳程度の商店が揃った地区に店舗を構える酒場です。昼夜を問わず、食事や酒を嗜みたい住民が集まり、それなりに繁盛しているようです。

店主を務めるのは、チェリーリアという名の年齢不詳のラミアの女性です。無類の酒好きであり、店で取り扱っているほとんどのアルコール類は彼女の独自のツテで入手しています。反面料理はほとんど出来ないため、複数人のコボルドをコックとして雇っています。

飲食店として経営していますが、同時に人族の社会でいうところの冒険者の店に相当する役割も同時に果たしています。店主のチェチーリアは人族の文化に興味を持っており、人が集まる場所を利用して、住民たちの困りごとと、それを解決できる人材を募集したのです。特に蛮族は人族よりもパーティを作って難事に立ち向かうという発想に行きつき辛く、一人で解決しようとしてドツボにはまることが多かったため、この事業は蛮族社会でも需要と供給がハマり、軌道に乗りつつあります。お困りごと解決の報酬はチッヒが持ってくる仕事に比べれば大したことはないため、店名の「鐚銭」の名がいい皮肉になっているという評価もあります。

また、この店では暇を持て余した腕に自信のある蛮族がたむろしており、金銭などのやり取りで協力を仰ぐこともできるでしょう。

「蟒蛇の」チェチーリア

「わぁいお酒。わたし、お酒だぁいすき～♪」
・ラミア/女/？歳

ガッシャの中心部で、大衆酒場「鐚銭亭」を経営する年齢不詳のラミアの美女です。三度の飯より酒が好きと豪語する酒豪で、酒場の店主のくせに常に酒瓶かジョッキやグラスを手に、アルコールを楽しんでいます。

普段はほんのり酔った上気したにこやかな表情をしていますが、実は卓越した魔法の使い手であり、若い頃は人族の生き血を得るための手段は択ばず暴れまわっていたようです。

当時は人族の村を侵略し乗っ取り、自身が頂点となって蛮族の集団を率いて餌となる人族を囲うという生活をしていたものの、すぐさま冒険者の手により阻止され支配者としての生活が長く続いた試しはありません。自身は運よくテレポートなどの魔法を駆使して窮地を脱していましたが、侵略しては奪還されるという生活を何度も繰り返すうちに、次第に人族は個々では弱くとも、危機に対して結託して立ち向かうと手に負えなくなるということを学んだ末、人族の文化や危機への対応力に興味を持つことになります。

ガッシャの街に流れ着いたのは偶然ですが、人間の街のように金銭のやり取りが活発に行われているところを気に入り、人族の文化を学んだ末に辿り着いた、趣味と実益を兼ねた酒場の経営に乗り出します。また、難事には協力し、個々では弱い力を何倍にも高める人族のやり方を模倣し、住民の困りごとを集めて解決するという、冒険者の店のような事業も展開しています。

「爆熱神掌」ルル・ル・ルル

「あなた、強そうですね！　バトりませんか！！」
・バステト/女/17歳

婿探しの旅の途中にガッシャに立ち寄り、そのまま居着いているバステトの少女です。淡い褐色の肌に背中まで伸ばした癖のある黄金色の髪を持ち、バステトにありがちな猫口が特徴的です。見るからに元気溢れる直情的な快活娘であり、性格もそのまま竹を割ったようなさっぱりとした人物です。

ガッシャに立ち寄ったのはたまたまですが、チッヒが強い、もしくは将来的に強くなりそうな蛮族をスカウトしているという話を耳にして、ここにいれば強い男と知り合えるかもしれないと意気込んでいます。

流派【リオリット臨死反骨掌】を使う格闘家であり、強いやつに会いに来たを公言しているだけあり、スリリングな戦いを好みます。相手の懐に飛び込み、その力を10引き出して、11の力で勝つというのがモットーです。

分かりやすい性格をしている方ではありますが、強ければ男でも女でも構わないといった節があります。ガッシャにやってきてから一方的に挑戦し、完膚なきまでに叩きのめされたアヌビスの墓守ルンに対して強い感情を抱いています。ルンに友達がいないことを知り、やはり一方的に親友だの心の友だのと言い張り、顔を合わせば「女の子でも構いませんので子作りしませんか！」と言い寄っている姿が見受けられます。